



第4回

# 文化ボランティアフォーラム 2009 in 滋賀

次世代の文化力を育む ～芸術と教育の連携 新たな挑戦！～



# 目次

ごあいさつ ～芸術と教育の連携 新たな挑戦！～ …… 3  
 しが文化芸術学習支援センター長 馬場 輝代

文化ボランティアフォーラム 2009 in 滋賀<概要> …… 4  
 次世代の文化力を育む～芸術と教育の連携 新たな挑戦！～

基調講演「芸術と教育のこれから」 …… 6  
 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官  
 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 奥村 高明

事例報告会（意見交流の部） …… 7

連携授業が学校を変える …… 8  
 草津市立志津南小学校長 馬場 豊

連携授業この10年  
 故きに学んで、新しい創造を生み出す …… 9  
 MIHO MUSEUM 学芸員 畑中 章良

文化庁委託事業 文化ボランティアフォーラム 2009 in 滋賀 2日目  
 パネルディスカッション要旨 …… 12

学生文化ボランティアを育てる心 …… 14  
 京都橘大学准教授 木下達文

文化ボランティアフォーラム  
 アンケート集計（ピックアップ） …… 14

温かく育ててくださった「人の力」 …… 15  
 しが文化芸術学習支援センター トータルコーディネーター 津屋 結唱子

## 文化ボランティアフォーラム 2009 in 滋賀 参加団体・個人所属一覧（50音順、敬称略）

岩手県 仙台市市民文化事業団  
 東京都 NPO 法人トリトン・アーツ・ネットワーク  
 芸術家と子どもたち  
 東京港区役所地域振興課文化協働推進係  
 日本ボランティアコーディネーター協会  
 財団法人 地域創造

神奈川県 横浜市 市民活力推進局 文化振興課  
 静岡県 浜松市議会議員  
 長野県 松代文化施設等管理事務所  
 岐阜県 NPO 法人さくら歌劇団  
 岐阜市立日野小学校  
 美濃加茂市文化振興課  
 美濃加茂市民ミュージアム

三重県 三重県生涯学習センター  
 三重県生活・文化部新博物館整備推進室  
 三重県生活・文化部文化振興室

奈良県 特定非営利活動法人 総合教育研究所  
 京都府 アサヒビル大山崎山荘美術館  
 京都市美術館ボランティア  
 京都橘大学

大阪府 門真市立第六中学校  
 キッズプラザ大阪  
 国立民族学博物館文化資源研究センター  
 国立民族学博物館ボランティア  
 国立民族学博物館ミュージアムパートナーズ  
 東京書籍株式会社関西支社  
 日本文京出版株式会社  
 日本ボランティアコーディネーター協会  
 龍谷大学

徳島県 大塚国際美術館  
 岡山県 岡山大学  
 財団法人 福武教育文化振興財団  
 社団法人 岡山県文化連盟

鳥取県 財団法人 鳥取県文化振興財団  
 福岡県 アートサポートふくおか  
 北九州芸術劇場  
 北九州市企画文化局文化振興課  
 九州国立博物館  
 日本ボランティアコーディネーター協会

鹿児島県 ネイチャリング・プロジェクト  
 沖縄県 沖縄県立知念高等学校

滋賀県 草津市社会教育委員  
 草津市立老上小学校  
 草津市立矢倉小学校  
 黒田紙業株式会社  
 甲賀市みなくち子どもの森  
 財団法人 滋賀県文化振興事業団  
 財団法人 地域創造  
 滋賀県教育委員会事務局生涯学習課  
 滋賀県県民文化生活部県民文化課  
 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール  
 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールサポーター  
 滋賀県立陶芸の森  
 滋賀県立琵琶湖博物館  
 滋賀医科大学  
 滋賀大学  
 しが県民芸術創造館  
 秀明アカデミー  
 パナソニック株式会社ホームアプライアンス社  
 MIHO MUSEUM

【運営スタッフ】  
 滋賀県教育委員会 事務局 生涯学習課 5名  
 滋賀県県民文化生活部 県民文化課 4名  
 財団法人滋賀県文化振興事業団 4名  
 しが文化芸術学習支援センター 33名（内、大学生18名）

|        |           | プログラム                                   | 参加者数（名）         |
|--------|-----------|---|-----------------|
| 10月18日 | スペシャルメニュー | びわ湖ホール<br>声楽アンサンブルによる<br>子どものためのミニコンサート | 40<br>(当センター受付) |
|        |           | 子ども向けオペラ<br>泣いた赤鬼                       | 60<br>(当センター受付) |
|        |           | 基調講演、事例報告会                              | 142             |
|        |           | 情報交換会                                   | 68              |
| 10月19日 |           | 公開講演、公開連携授業                             | 157             |
|        |           | パネルディスカッション、全体討議                        | 151             |
|        |           | 実参加者数                                   | 190             |
|        |           | 実運営スタッフ数                                | 46              |
|        |           | 総計                                      | 236             |

# 次世代の文化力を育む

「芸術と教育の連携新たな挑戦」

しが文化芸術学習支援センター長

馬場 輝代



「子どもたちは本物に出会っただろうか?」「子どもたちの心は育ったの  
だろうか?」そして「学校と美術館・博物館・ホール・企業等との連携を  
私達しが文化芸術学習支援センターは支援し得たのであろうか?」という  
課題をメンバーと共に自分に問い続けてきた10年間であった。これを一  
言で言えば「新たな挑戦はできただろうか?」につきる。

まず、「子どもたちが本物に出会うことは、子どもたちの心の成長と深  
く関わる」ことを、これまでの私たちの様々な連携授業の中で出会って  
きた。たとえば、ある女子高生が抹茶椀を作陶するのにこれまで大切に  
伸ばしてきた爪を惜しげもなく切り、制作に没頭したという。このよう  
な事例は挙げればいとまがない。私たちが言う「本物に出会う」とは、  
学習内容を通して、関わってくれた人々、そして自分自身に出会うこ  
たなのである。このコンセプトを私たちは実践の中で見だし、大切に  
した実践を数多く積み重ねてきた。

さて、これまでの10年間で多くのプランを持ち、成果も上げてきたが、  
私たちに忍び寄ってくる形骸化という影も存在する。「次世代の文化力を  
育む」ためには、私たち自身が文化力を持たなければならない。そのた  
めに研修会も行ってきたが、もっと連携への視野を広めることによって、  
新たな連携授業の創造をめざしていかなければならないことに、最近  
気になっている。それが「新たな挑戦!」なのである。特に、滋賀県の  
連携の特色として「学校での新たな連携授業の展開」に挑戦しなくては  
ならない。

今回の、文化庁委託事業「文化ボランティアフォーラム 2009 in 滋賀」を、  
「新たな挑戦!」への絶好の好機ととらえ、美術館・博物館・ホール・  
企業・滋賀医科大学、そして草津市立志津南小学校の全面的な協力を得  
て連携授業の創造に挑戦した。その具体的な内容は本誌に紹介されてお  
り、学習指導案も志津南小学校から出されている。

どの授業も個性的で、子どもたちの生き生きと学ぶ姿に多くの参加者  
は驚いておられた。特に4年生の「昔の人々のくらしから」の授業で、  
水を大切に知る知恵をテーマに滋賀県知事嘉田由紀子氏が授業をして  
くださった。子どもたちの活発な意見に知事も熱弁をふるわれ、熱気あ  
ふれる授業であった。授業はもとより、後の「次世代の文化力を育む」パ  
ネルディスカッションでも、連携授業の重要性を説かれており、私たち  
にとって大きな支援をいただいた。

この取り組みで再確認したことがある。それは、やはり学校が授業プ  
ランナーの主体者であり、その目標に向かって、私たち支援センターが  
どのように学校と専門家とを有機的に結びながら、専門家の持っている  
エキスパートな本物性を授業の中で主体的に発揮していただくか、私  
たち支援員一人一人が創造していかなければならない、と言うことである。

あたりまえ、といえはそれまでだが、このことこそが「連携授業」を  
風化させないための必須条件である。

今、教育現場では大変大きな変革を迎えつつある中で、私たちがめざ  
していることは「連携」を通して「新たな子育て・心育て」をすること  
である。「新たな」と求める限りは、留まってはならない。学校・連  
携者・支援センターがそれぞれ本物としての知恵を出し合い、授業展開  
の中で子どもたちと真剣に対峙し続けることで、次世代の文化力を確  
実に育んでいくことができると確信している。

最後になったが、本フォーラム開催にあたって、文化庁をはじめ連携  
に多大のご支援とご指導をいただいたみなさま、そして授業公開をして  
くださった志津南小学校に心より感謝申し上げる次第である。



文化庁委託事業 文化ボランティアフォーラム 2009 in 滋賀 <概要>  
**次世代の文化力を育む ～芸術と教育の連携 新たな挑戦！～**

日時 2009年10月18日(日)～19日(月)  
 会場 10月18日 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール  
 10月19日 滋賀県草津市立志津南小学校  
 参加者 全国の文化ボランティア、NPO関係者、文化施設関係者、文化・教育行政担当者・学校・大学関係者  
 文化ボランティア・コーディネーターの育成に関心のある方  
 主催 しが文化芸術学習支援センター運営委員会 [文化施設、教育関係者、企業、NPO、文化行政 他]

**2009年10月18日**

会場 滋賀県立芸術劇場  
 びわ湖ホール  
 小ホール

13:30～ 受付  
 14:30～14:40 開会  
 14:40～15:30 基調講演「芸術と教育の連携のこれから」  
 講師 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官  
 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 奥村 高明  
 15:40～18:00 事例報告会  
 コメンテーター 滋賀県立琵琶湖博物館特別研究員 布谷 知夫  
 公立文化施設活性化事業アドバイザー 柴田 英紀  
 コーディネーター 京都橘大学准教授 木下 達文  
 <事例報告者>  
 (横浜市) 横浜市 市民活力推進局文化振興課 主任調査員 鬼木 和浩  
 (福岡県) アートサポートふくおか 代表 古賀 弥生  
 (東京都) NPO法人 芸術家と子どもたち 代表 堤 康彦  
 (滋賀県) しが文化芸術学習支援センター トータルコーディネーター 津屋 結唱子  
 18:20～20:00 情報交換会 会場: レストランオペラ(びわ湖ホール内)  
 ※ホテル大昌草津行き 送迎バス有り

**10月18日 びわ湖ホール**

スペシャルメニュー

びわ湖ホール声楽アンサンブルによる子どものためのミニコンサート&  
 オペラ「泣いた赤鬼」ワークショップ

11:00～11:50 ミニコンサート(小ホール)

13:00～14:00 オペラ「泣いた赤鬼」・ワークショップ(中ホール)

子ども向け学校公演 新メニュー初公演(19日公開連携授業の事前学習)  
 入場無料



2009年10月19日

会場 滋賀県草津市立  
志津南小学校

- 8: 30～ 受付
- 8: 50～ 9: 20 公開講演「地域社会と連携した医学教育」 滋賀医科大学学長 馬場 忠雄
- 9: 30～ 11: 20 1年生～ 6年生公開連携授業
- 滋賀県立陶芸の森 1年生 /「「おおきなかぶ」のおはなしえざらをつくろう」 図工・国語  
2年生 /「「ともだちたぬちゃん」をつくろう」 図工  
特別支援学級 /「つんでつんでたかくたかくつんでつんでもっとたかく」 図工  
びわ湖ホール 3年生 /「泣いた赤おに」をびわ湖ホールで発表しよう!」 音楽・道徳  
しが県民芸術創造館 4年生 /「ミュージカル「こわれた千の楽器」の公演をしよう」 国語・音楽  
パナソニック(株) 5年生 /「冷蔵庫って、どんなふうに行けるの?そこにかくされた秘密は?」 社会  
滋賀医科大学 5年生 /「いま生きているわたしを感じよう」 道徳
- 特別講師 滋賀医科大学学長 馬場 忠雄
- MIHO MUSEUM 6年生 /「とびこめ! 伊藤若冲ワンダーランドへ」 社会・図工  
特別講師 MIHO MUSEUM館長 辻 惟雄
- 11: 25～ 12: 10 特別講師 滋賀県知事 嘉田 由紀子  
4年生 /「昔の人々のくらしから ～水を大切に作る知恵～」 社会
- 12: 20～ 13: 20 昼食・休憩
- 13: 30～ 15: 00 パネルディスカッション 「次世代の文化力を育む」  
パネリスト 文化庁文化部長 清木 孝悦  
滋賀県知事 嘉田 由紀子  
MIHO MUSEUM館長 辻 惟雄
- コーディネーター 財団法人滋賀県文化振興事業団理事長 岸野 洋
- 15: 10～ 16: 40 全体討議 「芸術と教育の連携」  
プレゼンター 草津市立志津南小学校 校長 馬場 豊  
コメンター 文部科学省 教科調査官 奥村 高明  
滋賀大学 教授 大嶋 彰
- コーディネーター 滋賀県教育委員会事務局学校教育課指導主事 人見 和宏  
公開連携授業の授業づくりについて、関係者より解説。  
その後、コメンターと参加者で意見交流。
- 16:40～ 16:50 閉会

## 「芸術と教育のこれから」

### 基調講演

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官  
文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 奥村高明



しが文化芸術学習支援センターセンター長  
馬場輝代による開会の挨拶



奥村高明氏(文部科学省初等中等教育局)の基調講演



事例報告会では、国内で活動する4団体の発表に3名  
のコメントーターから質疑応答が交わされた



文化ボランティア、行政関係者、文化施設関係者、  
学校・教育関係者など全国から約250名が参加した



(左から) コーディネーターの木下達文氏(京都橋大  
学准教授)、コメントーターの柴田英紀氏(公立文化  
施設活性化事業アドバイザー)、布谷和夫氏(琵琶湖  
博物館特別研究員)



(左から) 横浜市の鬼木和浩氏(横浜市民市民活力推進  
局)、福岡県の古賀弥生氏(アートサポートふくおか)、  
東京都の堤康彦氏(NPO法人芸術家と子どもたち)、  
滋賀県の津屋結唱子(しが文化芸術学習支援センター)

### <要約>

小中学校の教員、宮崎県立美術館の学芸員、また地域でのNPO活動などを経て現職となったことを紹介し、まず、「子どもと学習」について語った。画像を示しながら、幼児のままごとでの会話が大人とそっくりなこと、生存の厳しいアフリカの幼児は果物をナタで割って食べられること、1800年代のアメリカの農園で働く10代前半の子どもたちには反抗期はなかっただろうなどを挙げ、つまり「子どもは社会的、文化的に子どもになる」ものだとした。そのうえで、子どもが学習するということは、先生や教室、あるいは美術館、空間、教育課程、時間割といった人や物、ことのかなかで成立する関係的な実践である。社会的、文化的な存在としての子どもは、さまざまな社会的関係性のなかで学んでいるとした。

では、その「子どもと学習」がさまざまな関係性のなかで成立するとすれば、それらをどう関係づけデザインしていけばいいのだろうか。氏は、ここでいう「デザイン」とは単に色や形を決めることでは

なく、社会的なインフラを整えるに近い、学習の生態系と呼べるようなものであるとしたうえで、芸術と教育、美術館と学校との関係に言及した。すなわち、美術館と学校との関係は、お互いに単体だけでは成り立たないと。そこで、埼玉県加須市の加須小学校の商店街と連携し、結果的にまちづくりになっていった「加須小まちかど美術館」の事例や長野県の戸倉上山田中学校と信濃美術館との展覧会づくりの事例を紹介しながら、子どもが芸術の道具や作家の道具、町づくりの道具ではなく、子どもや生徒たちの育ちが中心に置かれて展開していくことが重要であり、また関わった商店街の人たち、行政の人たち、アーティスト、学芸員らもそれぞれの役割がより充実しながら美術や美術館についての見方や考え方が変化していくという関係づくりが大切なのだとした。

次に、博物館の事例について語った。同じ建物のなかに博物館と美術館のある沖縄県立博物館・美術館を取り上げ、博物館ではすでに分類・整理されたものに対して知識を得るといった見方が大きい、

美術館は誰かが作ったもの、誰かの見方に対して心が揺さぶられたのではないかと。また、北海道の旭山動物園では生態系としての動物だけでなく、経済としての動物も見せているし、日常にいるカラス舎もある。旭山動物園は、職員の考え方が継られ、展示となっている。動物を見る私たちの日常とか見方までを揺り動かすので面白いのだろう。これは美術館に置き換えてもよいのではないかと。

そして、最後に「何かの授業、何かのイベント、何かの連携を行うとき、かけがえのない子どもたちがそこにはいます。その子を中心に置きつつ、しかし生態系ですから同時に私たちもかけがえがない存在であることを自覚する必要があると思います。そう考えた時、答えはおそらく私のお話の中にあるのではなく、おそらく今、みなさんのいる場所と今行っている実践の中にあると思います」と励ました。さまざまな画像を用いて、会場の聴衆に問いかけながらの楽しい講演となった。

## 事例報告会

(意見交換の部)

3つの事例報告の後、事例報告者とコーディネーターたちと意見交換が行われ、以下のような発言がなされた。

**鬼木** 「芸術と学校教育」の連携に自治体に関わるということは重要だと思う。そのためには、市民のみなさんからこのプログラムを実施したいと行政に伝えていただきたい。行政を巻き込むことも心得ていただければありがたい。そして、その方法についてはそれぞれの場所で、その土地のやり方を見つけなくてはならないと思っている。自治体の職員と一緒に考えていただければと思う。

**古賀** 福岡県内の自治体と一緒に、芸術家を学校に派遣する新しい仕組みをつくらうとしている。行政と教育委員会、そして行政がつくった財団法人は、同じ役所なのだが、タテ割りの組織なので全く繋がっていない。

芸術と学校教育の連携を進めるには、そこに関わる関係者・関係機関の連携が不可欠。よりよい現場をつくるために、関係者同士を繋ぐことも私たちの役割であると思う。

**堤** 文化行政と教育行政とその両方で活動の意義を位置づけていくことが大切だと考えている。どちらかという文化振興の方から学校にラブコールをおくっていることが多いのではないかと。教育委員会などの教育行政の中でしっかりとこのようなクリエイティブな教育が位置づけられていくこと、教育行政に携わる方、先生などに、これが今の子どもたちの学びにとって大切なんだと広く知っていただくことが大切だと考えている。そのために民間のアートNPO、教育NPOが子どもというキーワードのもとに緩くネットワークを組んで、それを全国に広げていくこと、NPOや民間の力をネットワーク化して強くしていくことが大切かなと思っている。

**津屋** しが文化芸術・・・センターも県の補助事業ということで3年間の限定的な期間をいただきながら、3年経ったらまた他を考えようという、スタートから不安な

財政基盤の中で走っている。そういう意味で、今回のフォーラムがきっかけになって、全国あちこちで渦がまいて国全体でこういう事を支援していこうという気持ち、ウェーブが高まっていけばいいなという思いでいる。

**布谷** 現在のこういう事業の最先端の内容だった。こういう事業を実際どうやって広げていくのか、いろんな壁もあると思うが、全国の各地でまねをしてひろげていく、そういうふうにして世の中のシステムを全部変えていく必要があると思う。

**柴田** 子どもたちにとってどのような社会でありたいのか、どういう社会を目指していけばいいのか。皆さんの報告を聞いて、一人一人が一人一人をきっちり支えあう、助け合う、共に生きる市民社会というものを構築していく必要があるのではと感じた。「芸術と教育の連携」を図っていくためには、共に働くことが大切と感じた。コーディネーションのcoとは「共に」という意味。それぞれの団体、それぞれの人たちを対等にきっちり繋いでいくことが私たちは必要なのではないかと、どちらが上でどちらが下でもない。連携を図っていくためには、調整だけでなく、対等にきっちり仕事をおこなっていくことがこれから非常に求められるのではないかと。ミッションの共有ということも重要なポイントでありますので、そのミッションを共有してよりよい社会づくりのために私たち大人は頑張っていかなければならないと思った。

**木下** 連携というものを育てていくコーディネーション、という流れもあるかと思う。しかし実際、その社会関係の創造そのものが、例えば学校、文化施設に最初から求められたものではなかった。私はこれから、「町づくり」「人づくり」ではなく、「町育て」「人育て」という言葉を使っていきたい。サブタイトルにあるような「新たな挑戦」を考えていただきながら、またこの出会いを大切にしながら広げたいなと考えている。



情報交換会は、びわ湖ホール中ホールホワイエの特設会場で催された



全国各地からの参加者でにぎわい、おいしい料理を囲んで楽しい会話がはずむ



情報交換会後、琵琶湖湖岸を眺めながらミニピアノコンサート。全員で歌を歌い1日目が終了した



当日の運営には、学生ボランティア中心にセンターのスタッフ30名関わった

## 連携授業が学校を変える

草津市立志津南小学校長 馬場 豊



2日目は平日の小学校を会場に連携授業が公開された



1年生「『おおきなかぶ』のおはなしえざらをつくろう」  
(滋賀県立陶芸の森との連携)

本校の学校教育目標は「学びが生活に生きる教育」である。この背景には教育基本法の改正を発端とした大きな教育改革の中で、「活用する力」がクローズアップされてきたことによる。基礎・基本を定着させる教育活動に取り組まれてきたが、そこで学んだことを活用し、生かす教育活動への取り組みは希薄であったといえる。学びを活用し、生かす教育活動を意図的に設定し、子ども自身が「学びを生かし、活用して成功した実感」を内面に蓄積することが大切であり、学び、生きることの意義を学んでいくのである。

このような課題に対して、応えてくれたのが「連携授業」なのである。連携



中庭で、読み聞かせボランティアグループぽっかぽっかによる「おおきなかぶ」の劇。子どもたちは制作に向けてイメージをふくらませた



特殊なクレパスを使った絵皿の説明をする陶芸家の宮本ルリ子氏

授業は当然のことながら学校（担任）が主体性を持って授業目標・内容そして授業展開を構想していくのであるが、授業をより充実させていくために、専門性の高い特別講師を要請する。授業の中では専門的な話や指導が行われるが、それを理解して応え、子ども自らがより深めていくためには、これまで学んできたことをフルに活用することが必要になり、学習が深まるとともに、学ぶことへの楽しさや意義が身に付いていく。新しい教育の重要なポイントである。

10月19日、文化庁委託事業「文化ボランティアフォーラム 2009in 滋賀」が本校を会場として開催され、「次世代の文化力を育む」をメインテーマに、美術

館・博物館・ホール・大学・企業・地元  
の読み聞かせグループ等との連携による授業を全学級で公開することができた。どの授業も大変個性的であり、子どもたちは活発に活動して、多くの参加者の目を見張らせていた。この様子は本誌にまとめられているので詳細はご覧いただきたいが、どの授業も子どもたちが学んできたこと、それは聞き方や話し方だけでなく、感じ方や心の表現のしかたまでを精一杯表して＝活用し、生かした＝の授業であり、授業にかかわる特別講師もその思いや考えを子どもたちに真剣に投げかけておられた。4年生の「昔の人々のくらし ～水をたいせつにする知恵～」で授業くださった滋賀県知事嘉田由紀



3年生「『泣いた赤鬼』をびわ湖ホールで発表しよう！」  
(びわ湖ホールとの連携)。発表に向けて、声楽家から歌い方や振り付けを習った



4年生『ミュージカル「こわれた千の楽器」を公演しよう」  
(しが県民芸術創造館との連携)。2日後に、創造館の大ホールの舞台上で発表した



特別講師の滋賀県知事嘉田由紀子氏による授業。4年生『昔の人々のくらしから～水を大切にする知恵～』

子氏は、授業後校長室へ帰ってこられるなり、「子どもたちは、私が言ったことに次々と返してくる。私が考えてきたこととずいぶん変わった流れになったが、大切なことをわかってくれたと思う。」と話しておられた。この授業の最後には、琵琶湖博物館に展示されている「富江家（古民家）」を紹介され、12月17日に子どもたちは富江家に秘められている先人の知恵を半日ばかりで調べていき、調べて学ぶことのおもしろさを味わっていったのである。

3年生のびわ湖ホールとの連携授業では、びわ湖ホール初の子ども向けオペラ「泣いた赤鬼」を校外学習として鑑賞し

た。そして、そのときの感動をもとに自分たちも「泣いた赤鬼」のオペラを創ろうとしている音楽の時間の練習中に、オペラでの赤鬼が登場し子どもたちを指導するというすばらしい連携の場面を作ることができた。子どもたちの表現がどんどん深まっていったのをすべての参観者は感じていった。この授業後子どもたちは練習を重ね、ほんとうに感動的なオペラを生み出し、発表していったのである。

この連携授業ではさらに重要な意義がある。それは、特別の講師をはじめとして、多くのボランティアの方々などに子どもたちが出会っていくことである。子どもたちはその専門性に出会うだけでなく、生き方に出会うのである。生き方



琵琶湖博物館の学芸員と共に、展示の紹介をした



嘉田知事と子どもたちの活発な授業の様子

に出会うことは、将来の自分の夢を描くことにつながっていく。それは、今の自分自身の生き方を見つめ直していくことでもある。

これらのことは、一回切りの授業では実現できない。学校が主体性をもち、しが文化芸術学習支援センターの積極的な支援によって、専門家が専門性をより発揮でき、事前・当日・事後の授業が一貫して充実してこそ、授業の質は高まっていくのである。そこに、サブテーマ「芸術と教育の連携 新たな挑戦!」の意図がある。このような連携授業が学校を変革することにつながっていく。



特別支援学級『つんでつんでたかくたかくつんでつんでもっとたかく』（滋賀県立陶芸の森との連携）



特別講師の滋賀医科大学学長馬場忠雄氏による授業。5年生の『いま生きているわたしを感じよう』



5年生『冷蔵庫って、どんなふうに行けるの？そこにかくされた秘密は？』（パナソニック㈱との連携）。冷蔵庫の断面が登場した



書道家から事前に学んだ「筋目書」(若沖が用いた技法)で、本物の魚をじっくり見ながら、水墨画を描いた



出来あがった作品は、卒業記念品として表装して掛軸に仕上げられた



6年生『とびこめ!伊藤若沖ワンダーランドへ』(MIHO MUSEUM との連携)。特別講師としてMIHO MUSEUM 館長辻惟雄氏が事前学習と当日の導入をされた

本物のもつ素晴らしさを多くの子どもたちに体験してほしい——美術館のもつ質の高い作品や人材が何か役に立たないだろうかというただ純粋な気持ちから始まった美術館と学校との連携授業は、これまでさまざまなプログラムが展開されてきました。初めは、やってみようという意識の高い、あるいは進取の気質の高い熱意ある先生方の協力でスタートした小規模なものでしたが、普段の授業では見せない子どもたちの輝く姿に接した現場から次第にひろがりを見せ、継続的にカリキュラムに取り込む学校も出てきました。

改めて振り返ってみれば、この連携授業がはじまって10年が過ぎ、これまでどれほど多くの子どもたちとの出会いがあったことでしょうか(当館で統計を取り始めた2006年以降2009年までの4年間で、延7500名ほど)。10年前に出会った小学6年生はすでに20歳を越え、いま、どんな若者に成長しているのでしょうか。光陰流水の如しといいますが、少々感慨深いものがあります。

昨年10月に実現した連携授業「とび

こめ!伊藤若沖ワンダーランドへ」は、そのひとつのピークといえるものでした。学習のポイントは、小学6年生の子どもたちが室町文化の一つ、水墨画を学ぶ活動の中で何をどう体験させるか。これを学校教員、美術館、専門家がそれぞれの立場から熱い思いをぶつけ合いながら練り上げ、時間をかけて最高の形で実現させることができたのでした。

授業の行われる秋、MIHO MUSEUMではちょうど、江戸時代の奇想の画家、伊藤若沖の特別展「若沖ワンダーランド」が開催されており、しかも館長の辻惟雄氏はその研究の大家、第一人者でした。打ち合わせていく中で、館長自らが授業にかかわることになり、子どもたちが、本物の作品を目の前にして最適の専門家から話を聞くという、最高の形となりました。また学区の地域には、墨の扱いのプロである書家、西口青咲さんが偶然にもいらっしゃいました。西口さんの積極的な参加で、本物の作品に触発されて子どもたちが自分の手で表現するための墨絵指導の、最高の形が整いました。これで、子どもたちが若沖

の水墨画を通じて水墨画の世界に浸っていくための、最高の作品と人材が揃いました。

授業の流れは、まず、MIHO MUSEUMを訪ね、会場で本物の作品に触れる。そして次に教室で、再び辻館長と出会い、西口さんの指導の下、自分の世界、作品を作り上げる、というのですが、その間に、子どもたちがちゃんと描けるように西口さんが何回か墨絵の技法指導の時間をとってくださいました。これはとても大きなことで、子どもたちにとって墨絵の世界がより身近なものになったはずです。さらに当日のサプライズとして、本物の画材、鯛や平目、海老やサザエといった海の幸も用意され(これも学区内に偶然海鮮関係者がいらっしまった)、若沖がおそらく同じようにして描いたであろう状況が用意されたのでした。その結果、辻館長も唸るほどの素晴らしい作品がたくさんできあがり(それらの墨絵はその後表装され、卒業記念の掛軸となりました)。

10年前、小学校で始まったこういった連携授業は、プログラムによっては実

施校が高等学校へとひろがっているものもあり、同じ題材でも幅広い年齢層や学習段階で実施できる可能性を示しています。また内容についても、制作中心の活動から、食文化や茶の湯、おもてなしの心といった日本の伝統文化の学びへと深まりを見せ、一つの題材からさまざまな学習が展開できる可能性も示しているといえます。

美術館や博物館が来館者を受け入れるだけでなく、いわゆるアウトリーチ活動に力を入れている理由はそれぞれの館の置かれた立場によってさまざまです。学校との連携授業を行っている事例は現在全国で見られますが、あくまで学校での学習という前提で教員が主導をとりながらそれぞれの立場を尊重し、かかわるプロの専門性をうまく活かした本当の意味での連携関係は、そう多くないのではないでしょうか。現在、滋賀県で展開している状況、つまり、連携ということに理解のある館組織や意識が高く熱意のある学芸員の存在、接点の少ない学校と美術館・博物館という施設、いうならばそこにいる人と人との出会いを繋ぐコーディネーターの存在、授業実施のサポートや人材を派遣する組織とそこに参加する文化ボランティアの存在、全体を理解し支援する行政マンの存在、それら個々の存在がバランスよく繋がってひとつになり、大きな推進力を生み出している状況は、“滋賀モデル”とも呼ぶべき、非常に稀有な例といえるかも知れません。

学芸員の立場から見て学校の図工、美術にもっとあったらいいなと思う要素は、やはり何といても本物と出会う機会だと思います。たった一度の出あいが人生を変える——本物のもつ力にはそれほどの大きな力があります。また、本物というのは、いわゆる美術品と呼ばれる“物”だけではありません。人生を真剣に生きている“人”も本物に他なりません。子どもたちが豊かな人生を送るためには、いかに多くの本物に巡り逢える

かに尽きます。そのためには、手間がかかっても周囲の大人たちがその機会を少しでも多く提供できる努力をどれだけしてあげられるかにかかっているといえるでしょう。教科書だけに頼るのではなく、専門性の高い人材や機関をうまく活用できる手法、そして本物に巡り逢うことができる機会—連携授業はそのひとつの形を提案しているのではないのでしょうか。

ほんとうに美しいもの、本物の作品や真剣に生きる大人の姿に触れたとき、子どもたちの目は眩いばかりに輝き、光に満ち溢れます。その感動は、やがて大きな奔流となって、その後の人生を限りなく豊かなものにしていくことでしょ



MIHO MUSEUM での校外学習では、辻館長が作品の解説をされた

これからの将来を担っていく子どもたちは、社会の大切な宝物です。本物を通して体験した今日の感動の種がいつの日か子どもたちそれぞれの人生で芽吹き、感性も、心も、真に豊かなものとなり、そして希望に溢れる明るい未来が訪れることを願ってやみません。

さいごに、私が強い感動に包まれた一冊の本を紹介します。この本との出会いは大きな指針となりました。それは、レイチェル・カーソンの「The Sense of Wonder (センス・オブ・ワンダー)」(上遠恵子訳 1996 新潮社)。レイチェルが亡くなる直前の1956年に遺した珠玉のエッセイです。その中から次のことばでこの報告を締めくくりたいと思います。

『子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます…

生まれつきそなわっている子どもの「センス・オブ・ワンダー」をいつも新鮮にたもちつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のよろこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばにいる必要があります…

子どもたちがである事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです…

美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとつたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのように見つけた知識は、しっかりと身につきます。

消化する能力がまだそなわっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたがるような道を切りひらいてやることのほうがどんなにたいせつであるかわかりません』



畑中学芸員の小学校での導入の様子

パネル  
ディスカッション  
(要旨)

10月19日(月)  
13:30～15:00  
滋賀県草津市立志津南小学校 体育館



パネルディスカッションの会場は、小学校の体育館。懐かしい空気を感じながら、次世代の文化力について語り合った

パネリスト 文化庁 文化部長 清木 孝悦  
滋賀県知事 嘉田 由紀子  
MIHO MUSEUM 館長 辻 惟雄  
コーディネーター 財団法人滋賀県文化振興事業団 理事長 岸野 洋  
司会 財団法人滋賀県文化振興事業団 中西 薫

### 自己紹介と公開連携授業について

清木 3年生のオペラでよく声が出ていると思った。前日にびわ湖ホールでオペラを観たことを聞き、やはり本物の力は違うなと改めて感じた。

辻 我々の未来は子どもに、小学生や中学生にあるんだということを本当に痛感した。

嘉田 4時間目に授業をして、小学生の方が大学生よりも物事を感覚的に掴んで本質的の質問をする力があると感じた。人間が生きる上での根この質問を出す力がある。これは、学ぶ、あるいは教育の本質ではないかと思う。また、びわ湖ホールなどの芸術分野だけでなく、地元の家電製造企業などサイエンス分野の授業もあり、日本国内に対して十分に発信できるだけの授業が出来上がっていた。

### 次世代に文化をどのようにして伝えていくか

嘉田 3年前に「3つのもったいない」を訴えた。「お金の無駄遣いもったいない」「子どもたちの自ら育つ力、損なったらもったいない」「琵琶湖の自然壊したらもったいない」。「もったいない」とは単なる節約だけではなく「ものや人が本来持っている力が発揮されない」と心おしい」と思う気持ちのこと。滋賀県には素晴らしい文化力がある。これを自覚して甦らせて発信し、次の世代に繋いでいきたい。

今年6月に滋賀県文化振興条例を制定した。この条例の特色は「文化の範囲を芸術から少し広げる、生活文化も含める」「人が育つことを重視」。風景や景観も大事な文化であり、文化の振興にあたって継承・発展を担う人材が育つ、その地位の向上を図ることを主眼としている。

辻 素晴らしい文化的環境に恵まれているこの滋賀県の中で、若い世代が豊かな文化を自ら身につけて育ってほしい。その為には

親に当たる世代が文化に親しみ、文化力を身につけ、毎日の生活の中で子どもに伝えるということが大事。

清木 文化力とは、芸術文化に触れて感動したり楽しさを知り、感性がより磨かれ、一人ひとりの可能性をより引き出すのではないか。郷土や国の伝統的な文化を次世代に継承することも含め、未来の国の力に繋がるのが、この文化力ではないか。

文化芸術に限らず、自然体験や社会体験にしても、現場で体験するというには理屈を超えた力がある。「感性」「本能」「本質」に働きかける力があるのでは。

文化庁では全国で3つの芸術文化体験事業を行っている。各学校が希望する演目のプロのアウトリーチ「本物の舞台芸術体験事業」。地域の芸術家も含めプロの芸術家を学校に呼び、講義や実技体験を提供する「学校への芸術家派遣事業」。土曜や日曜を中心に学校や文化施設で伝統文化を体験する「伝統文化子ども教室」である。

### 本物の大切さ

辻 有名な本物は図録等やテレビでよく目にするが、実物を見ると改めてすごいなと感じる。若冲展でも象と鯨は新聞等で紹介されているが、観た人は、やっぱり実物・本物は違うと言う。美術に限らず、音楽や演劇にしる本物に接するとやはり違う。テレビは便利だが、実際の雰囲気はわからない。

嘉田 本物と対極の言葉は、贋物。あるいは伝聞情報。我々の身の周りは伝聞情報で溢れ、本物と触れる機会が少ない。教育システムの中で情報化が進みすぎると、伝聞情報と贋物の中で何がなんだかわからなくなって、単に世論に流されるだけ、あるいは自分で考えることを放棄してしまう子どもや国民が増えるのではないかということをおそれている。

連携授業では、子どもたちが専門の先生

に直接質問できる。一番物事を知っているのはその分野を極めた人。極めた人はわからないことがわかり、知らないことは知らないと言える。子どもたちがそこに触れ、世の中にはわからないことの方が多いことを知り、自分で考え、自分で感じたことに素直に従うことを覚えてほしい。子どもたちの本来持っている力が、本物に触れることで甦って育っていくのではないかと思う。

清木 本物と贋物を区別する力は、本物に直接触れることで育つのではないか。国の方向としての新しい教育課程では、学校で様々な体験をしながらできるだけ本物に触れ、その道のプロから話を聞くという取り組みを増やしている。

辻 本物を選び出す努力は我々が引き受けるとして、その結果選び出された本物になるべく数多く見ることが大事。何百年も何千年も経ったそのものが目の前にあるというのは素晴らしいこと。

嘉田 一方で、贋物から、本物を知ることがある。琵琶湖博物館がまさにそれで、本来は琵琶湖、滋賀県、大地がフィールドではあるが、本物というのはなかなか見えにくい。見えるようにする為の入り口としての博物館である。どうしても本物に触れない時間・空間にリンクさせる役割がある。本物至上主義ではなく、両方セットで上手く繋ぐことが大事。文化というのは、拡散。野に放つように自由な発想というのを許す、それを楽しみと思う周囲の大人たちが子どもの文化力を養う。子どもの内側から溢れる思いを勝手に止めないことが大事。

清木 体験事業と言っても、単に受身で鑑賞してもらおうというだけではなく、事前にワークショップを行い、プロから指導を受けて鑑賞することに意味があると思う。



(左から) 全体討議のコメンテーター奥村高明氏、大嶋彰氏 (滋賀大学教授)



(左から) パネルディスカッションのコメンテーター岸野洋氏 (滋賀県文化振興事業団理事長)、パネリストの清木孝悦氏 (文化庁文化部長)



全体討議では、左端 人見和宏氏 (滋賀県教育委員会事務局指導主事) が司会を務め、会場との意見交流が進んだ



連携授業の授業づくりについて (左から)、書道家と学校長から解説



(左から) パネルディスカッションのパネリスト嘉田由紀子氏 (滋賀県知事)、辻惟雄氏 (MIHO MUSEUM 館長)



それぞれの持つ課題や今後の方向性について熱心に話合われた

### それぞれの立場から、次世代の文化力の育み方

清木 グローバル化社会での競争力をつける為には、子どもの創造力を引き出す必要がある。それが将来の国の力であるが、クリエイティブに考える能力を養うには芸術教育が一番。効果的に創造力を身につける為には、芸術教育をもっと充実させる必要がある。芸術教育や文化的体験ができるような取り組みを文化庁としても進めていきたい。

嘉田 子どもたちが文化力をつけ、豊かな人生を拓いていくことが、結果として経済力や観光力に繋がっていく。県の文化政策を文化経済と繋ぐ動きを考えている。

日本人はコンテンツを造る力が素晴らしく、他国の追随を許さない。千年前に鳥獣戯画をうんだように、伝統的に図像イメージを豊かに持っている。コンテンツ産業を育てることが経済力に繋がる。いまや漫画コンテンツ産業は輸出額として、鉄鋼・スチールを抜いている。温暖化対策は単なるエネルギーの問題ではなく、生き物や文化を大事にすること。それが人間の内面を大事にすることに繋がっていく。滋賀県は自然豊かで、文化も豊か。文化経済立国を、滋賀県から始めていきたい。

清木 ソフトヒューマン支援をもっと充実する。アニメ、漫画、ゲームなどのメディア芸術分野は、日本が世界で最先端。これを伸ばさない手はない。アニメーターやクリエイターの人材育成にも大いに取り組んでいく。辻 漫画はもともと子どもの文化。子どもか

ら大人まで漫画に親しむ生活があったが故にアニメが高度に発達し、鉄鋼産業を追い越すような産業にまで成長した。漫画文化は日本の美術の伝統の中に確固としてある。若冲の象鯨図屏風も鳥獣戯画の伝統の中にある。あそこに描かれているのは単なる象、単なる鯨ではなく、人間の心を通した象であり鯨である。最近、動物は人間に聞こえない超低周波音で会話をしているということがわかってきたというが、そういうものを素直に理解できるのが子ども。子どもは、動物の世界と自分の世界と区別をしない。そこから出てきた日本文化というのは、子どもによって生まれなければいけない。子どもの発想、子どもの心を大事にすることが、次代の文化力を育む力になるのではないか。岸野 10月17日にびわ湖ホールにおいて「しが子ども文化芸術祭」が開催され、ポール・ウインター氏と知事が対談された。知事に対談の感想を。

嘉田 動物は、生きるために音を出しているが、それをポール氏は音の美しさで感じられた。その感覚がすごい。大地が、地球が、自分たちに向けてメッセージを送っている、それが鯨や狼。人工物に囲まれていると、自然界からのメッセージの感度が鈍くなる。そこをポール氏が目覚めさせてくれたと思う。

### 地域で活動する参加者へのメッセージ

清木 いくら予算が増えても現場で活用して、学校では子どもに伝えないと意味がない。今日、現場で関わっている方に集まっ

ていただき、現場に持ち帰っていただいで活用いただくというのは本当に有難い。これから大いに期待したい。

嘉田 お金ではない、どこまで汗をかけるか、どこまで本気で当事者となって、一緒にやるかが大事。すべての公務員が、そのような気持ちでミッションに取り組んでいきたい。

辻 日本の全体における文化政策や文化活動にかかる予算というのは、依然として低い。とにかく、活動自体を活発にして発言を強くして、自分たちにとって必要だということを強くアピールすることが何よりも必要。各地でそういう活動が活発になれば、その勢いで予算も増やざるを得ないということになってくる。

岸野 文化庁の清木部長からは、これから人づくりに力を入れたいと言っただけで大変嬉しい。知事からは、県の文化振興条例に伴う様々な施策をやっていききたいという決意を感じた。辻館長は、MIHO MUSEUM から滋賀県をもっともっと発展させていきたいということを感じた。何より最初に言っていた、「子どもには未来がある、明日がある」。その子どもの未来を育む、文化力によって育むことによって日本全体が大きく生まれ変わっていくのではないかとと思う。

参加者数：151名  
(一般参加者 117名、運営スタッフ 34名)

今年度は、関西で初めての文化ボランティアフォーラムを開催することができ、まずはお越し頂いた方々、そして事業を支えてくださった関係者の皆様方に、御礼申し上げます。私は現在、文化ボランティアを一つの研究テーマとしていますが、本格的に研究・実践をしようと考えたのは2000年頃でした。当時は全国的にみても国立科学博物館がミュージアム組織のボランティアについての協議会をお世話していたくらいで、それほど大きな動きはありませんでした。まだ「文化ボランティア」という言葉もありませんでした。しかしながら、この分野は今後大きく動き出すだろうと予測をし、ミュージアム・ボランティア・ラウンドテーブル（MVR）というネット上のネットワーク組織を立ち上げ、今年で10年目となりました。参加メンバーが全国で文化ボランティアとして、あるいはコーディネーターとして活躍していくようになりました。一方で、個人的には縁あって、2001年度より京都橋大学で働くこととなりましたが、ある機会に津屋さんとお会いすることとなり、文化・

芸術と学校を結びつける事業になにか大学も関われないものかと考えました。そのときに、真っ先に思いついたのが「学生文化ボランティア」ということでした。当初は試行錯誤の連続でしたし、専門家や先生の中には、未だに「学生に活動は任せられない」と言われることが多々あります。しかし、子ども達と目線が近い学生だからこそできることもたくさんあることを私は彼らから学びました。初期のメンバーがとても良くがんばってくれて、学内でも学生表彰を受けるに至り、その礎となりました。また何よりも学校や子ども達や社会が変化していくことにとても驚かされました。学生たちも、当初「ボランティア」という言葉から受けるマイナスの印象と、実際に活動した中で得られる楽しさ・やり甲斐などの部分に共感していくなど、その考え方に変化が生まれていきます。もちろん、課題はあります。経験や知識の不足、本業としての授業やアルバイトとの調整、就職活動や卒業論文など学年による縛り、世代交代や引継、経済的な問題など、書き出したらきりがありません。

ただ、そこには学生特有の課題もあります。文化ボランティアを行うほとんどの人に当てはまる共通課題である場合も少なくありません。大切なことはそうした課題に対して整理を行い、どのように対処していくのが重要で、そのことを考えたり調整したりできる「コーディネーター」の存在は今後の社会になくはならない人材となるでしょう。この10年で日本国および自治体の財政基盤が大きく揺れてきている中で、魔法などで立て直すことは現実的にはできません。地道に「お金の使い方」を見直しながら、「人の力の生かし方」を多様に学び、成果を積み上げていってこそ、新しい未来を育てられるのだと信じています。これからも出来ることを着実にやっていくのが使命だと思っています。



学生を中心とした文化ボランティアが子ども一人一人によりサポート

## 文化ボランティアフォーラム アンケート集計（ピックアップ）

### 参加者の感想

- ・芸術と教育の関係は、両者が別のものであるために、必然的に困難さを抱え込むことになってしまうのですが、一方で、だからこそ、実り多いものになるのだと思います。各発表者の事例は、それぞれ個性的な取り組みですが、いかにして、子どもにとってよりよいものができるかという点では共通していたように感じました。
- ・過去の文化ボランティアフォーラムと違い、芸術と教育の連携に重点を置いた内容であり、新鮮な切口で有意義でした。
- ・学校の中だけの学びには限りがあります。地域の力をかりて一緒に子ども達の力を伸ばしていくことはとても大切だと思います。とても勉強になりました。ぜひ滋賀のフォーラムを参考に長野でも実現可能な実践は何か、ボランティアと話し合っ進めたいと思います。
- ・子どもは鋭い直観、感性をもつ創造的存在。「子ども力」が未来をつくる原動力ということを2日間で深く共感した
- ・現在、次世代育成の観点で学校に公立文化施設や文化協会と連携してプログラム授業を実施しています。本日の公開授業は今後大いに生かせると思いました。1つの授業、1つのテーマにいくつもの要素を織り込んでいることで、授業に厚みが出ていると感じました。また、想像以上にたくさんの方が参加され、このような活

動を行なっている方がこんなにいることを発見しました。

- ・公開授業では周りに関係のない大人がいるのに普通に授業を受けている姿に少し驚きました。滋賀県が生んだ芸術家を大切にしている、地域の文化を大切にしていると感じました。
- ・単発の企画ではなく、観賞→創作→観賞の循環の大切さを感じた。多様な人が集まってこそできるものの大きさを感じた。
- ・文化芸術で子どもも元気になるが、教師も元気をもらえる。学校教育の中でも子ども達は成長できますが、小さい頃にいろいろな人や物との出会い、特に本物との出会いは素晴らしいことだと思いました。
- ・様々な角度からのお話の後、やはり人と人との支え合いが一番の財産と感じました。今後の取り組みの時に、常に思い出しながら、させていただきたいと思います。
- ・文化施設などの持つ人やコンテンツが、連携によって学校という場でいかせる事例をたくさん見せていただき、今後のヒントになった。
- ・教師を目指す上で授業作りや子どもへの対応、目標が参考になった。アート以外にスポーツなども芸術の一つだと考えます。運動分野があればそれに関するボランティアも広がっていくと思います。
- ・「アート」を子どもに渡すことの大切さを改めて痛感。2日間で受け取った大切なことを忘れず自分の事業を進めていきたい。



今から10数年前、世田谷美術館での、美術館ボランティア活動を通じて、「芸術には子どもの心を癒す、輝かす力がある」「すべての子どもたちに、本物の文化・芸術に触れる機会を与えたい。それには、学校と美術館が連携できたら。」と、小さな夢の種が播かれました。その後滋賀へ移り、その種は、美術教育を専門とした小学校校長先生との出会いをきっかけに、滋賀の土で実を結びました。

平成12年、美術館・芸術家と学校を、文化ボランティアを中心としたNPOが繋ぎ、教室の子どもたちに文化・芸術体験プログラムを実施する「連携授業」が始まり、NPOはコーディネート役とサポート的立場に徹しながら、「人から人へ」と繋ぎ、現場での実践を積み上げていきました。「学校現場への支援」にこだわり、平成15年、16年、17年は文化庁文化ボランティア推進モデル事業の助成をいただき、平成17年には当時の文化庁長官河合隼雄氏が、滋賀県の活動を視察に来られたことから、活動が全国へと発信されました。その後、学校教育現場での実践は、公民館や子ども会との連携、さらには、国際交流、被災地支援へと、活動の場が広がりました。その後、平成18年には(財)滋賀県文化振興事業団との協働で、「しが文化芸術体験サポートセンター」を開

設。さらに平成20年より、民と官による新しい協働の仕組みとして、「しが文化芸術学習支援センター」が開設され、平成21年度は、幼稚園、小・中・高校・養護学校の子どもたち1万人に、文化芸術体験支援をしました。そして、さらに本年は、文化庁全国文化ボランティアフォーラムの開催という、これまで経験したことのない、全国規模の事業に携わる機会をいただきました。若いスタッフたちと共に、多くの方の助言をいただきながら準備を進め、いよいよ当日を迎えることができました。2日間、盛りだくさんのスケジュールの中、企画・運営面では、これまで活動を支えてくださった関係者の方、地域の方も含め、総勢60名以上の方が集結くださり、細やかにサポートしてくださり、滞りなく終えることができました。遥々遠方から来てくださった講師の方、参加者をお見送りしたとき、自然と涙が溢れてきて、感謝で胸がいっぱいになりました。

この10年間を振り返り、あらためて実感しているのは、「人の力」の素晴らしさです。このような、連携活動が広がったのは、「文化施設」「学校」「行政」「地域」それぞれに、「子どものために」という信念を持った「つなぎ役」「コーディネーター」の存在があったということです。その「人と人の繋がり」から、組織的な縦割りを

崩し、横で繋がることができ、現場が必要とする支援が具体化し、ここまで発展していきました。多くの「人の力」と、その地域の持つ、「自然、文化、伝統、芸術の力」が繋がり、そこから生まれ出る活動の、その創造性の素晴らしさには、常に驚きと発見があります。そして、中学、高校の授業で、スタッフに声をかけてきて、「小学校で連携授業を体験したよ。そのときに居たよね。」と、声をかけてくれる生徒もいて、子どもたちの心に、今も鮮明に残っていることを、嬉しく感じています。そして、さらに大学生になり、センターの文化ボランティア活動に参加している姿を見るとき、活動を続けてきたことにより、支援された子どもが、文化ボランティアに成長し、共に活動するという新たな繋がりが生まれています。

今回のフォーラムを通じて、あらためて、これまでに出会ったすべての方々、そして、文化庁の文化ボランティア支援事業の担当者の方、それぞれの立場で、私たち文化ボランティアを、気長に温かく育ててくださった、その「思いやりの心」に深く感謝し、これからも、次世代文化芸術支援活動に専念し、子どもたちの活動の現場で、実践を積み上げる中で、さらなる協働のあり方を検討していきたいと思えます。



文化ボランティア・コーディネーター研修の様子



フォーラムの事前スタッフミーティング

**第4回 文化ボランティアフォーラム 2009 in 滋賀**  
次世代の文化力を育む ～芸術と教育の連携 新たな挑戦！～

---

2010年2月11日 発行  
発行 しが文化芸術学習支援センター運営委員会  
〒520-0044 滋賀県大津市京町3-4-22  
tel. 077-525-9995 fax. 077-524-6300  
mail. shiga-aspo@shiga-bunshin.or.jp

<編集協力 (株)アム・プロモーション>